Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-20

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター活動紹介

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,1:132-157

(Issue Date)
2009-08-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001663

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001663

KOBE UNIVERSITY

神戸大学大学院 人文学研究科 地域連携センター 活動紹介

当センターの活動の淵源をたどるとき、1995年1月の阪神・淡路大震災を抜きにして語ることはできません。このとき、危機に瀕した地域遺産の救済・保全活動が、市民・自治体・大学の三者による協力のもとになされました。こうした三者連携のあり方は当センターの活動の基礎になっています。

2002年11月の設立以来およそ6年半が経過し、当センターの活動の範囲は少しづつ広がりをみせてきました。このことは同時に、多くの自治体や市民グループとの連携関係が新たに生まれてきたことを示しています。このコーナーでは、多岐にわたってきた当センターの諸活動のこれまでをまとめ、紹介してゆきたいと思います。

歴史文化をめぐる地域連携協議会

当センターでは、各年度末に、一年間の活動を集約する意味もこめて、県内の自治体職員・市民団体代表者・大学関係者を集め、歴史遺産の保存・活用について議論する連携協議会（カンファレンス）の場を設けています。これまで七回の協議会を開いており、議論したテーマと参加者等については、表1の通りです。

協議テーマについては、自然災害や自治体合併など、それぞれ年の時宜に適った問題を取り上げており、毎回七〇名前後の参加者を得て、活発な議論が行われています。地域の歴史文化をめぐり、このように官学民の代表者が集まって協議する機会は他にはありません。この協議会が、関係者の情報共有と相互交流の場になり、これを通じて歴史遺産の保全・活用をめぐる連携関係が深まっていけば幸いと考えています。（坂江）

	年度	テーマ	参加
第１回	2002	地域歴史遺産の新しい活用のあり方を考える	27 機関 70 名
第２回	2003	自然災害から地域の歴史遺産を守る	39 機関 51 名
第３回	2004	市町合併と地域遺産の保存・活用を考える ――公文書・文化財・地域史料――	56 機関 76 名
第４回	2005	地域歴史遺産と市民とを結ぶインターフェースの構築	59 機関 83 名
第５回	2006	地域の歴史文化を担う人材の育成と大学の役割 ――ふたたび 大学・住民・自治体との連携を考える――	60 機関 79 名
第６回	2007	地域遺産の保全・活用のために何が必要なのか ――地域連携事業から見えてきたもの――	49 機関 69 名
第７回	2008	自治体合併後の地域遺産の保全・活用をめぐる現状と課題	43 機関 74 名

表１　これまでの地域連携協議会

自治体史編纂と地域づくり支援

尼崎市富松における連携事業

二〇〇二年から、尼崎市の市民団体「富松城跡を活かすまちづくり委員会」（以下、まちづくり委員会）との連携事業を行っています。

尼崎市富松には、中世の城跡である富松城跡があり、現在も城の防御施設である土塁と堀の一部が残ってます。この富松城は、一六世紀前半の畿内の戦乱について記述した軍記物『細川両家記』に数度にわたってあらわれ、戦国期の西摂地域における重要な軍事拠点であったことがわかります。

しかし、この富松城跡の土地は個人の所有であったため、二〇〇一年一二月、相続税として国に物納され、競売にかけられる可能性が出てきました。これを受けて、地元では、富松城跡を保存し、町づくりに生かすことを企図して、まちづくり委員会が発足し、二〇〇二年一一月から一二月にかけ、まちづくり委員会主催の「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」（以下、富松城展）が、富松神社において、五日間開かれました。この展示会は尼崎市や神戸大学の協力を受けた市民の手作りの展示会で、地域住民、行政、大学の三者の連携である点、市民参加型の展示会である点など、当センターの活動のルーツの一つとなりました。

富松城展は期間限定の展示会でしたが、この成果を生かし、また富松城や富松地域について、広く発信することで、富松城跡の保存・活用を進めるため、まちづくり委員会と、当センター、尼崎市が連携して、インターネット上に「バーチャル富松城歴史博物館」が作られました（http://www.tomatsujyou.com/）。

この富松城歴史博物館は、あくまで仮想のものですが、立地や外観、各フロアの構成など、現実の博物館のように設計されています。こうした設計や展示について話し合う過程は、住民と研究者が博物館というもののあり方について考え、理解を深める

貴重な機会ともなりました。当センターでは、常設展示室A「文献史料から見た富松城」の「展示」を担当しています。

さらに二〇〇七年には、まちづくり委員会編『もっと知りたい　中世の富松城跡と富松』が刊行されました。同書は、研究者だけでなく、市民も執筆者となり、富松城を中心としながら、富松地域の様々な側面を取りあげたものです。当センターでは、編集・執筆に協力しました。

現在、まちづくり委員会をはじめとする、富松地域の住民の活動は、富松城跡の保存だけに収斂しない広がりを持っており、地域連携事業を展開していく上で、一つのモデルケースとして注目されます。（村井）

尼崎市との連携事業

中在家町町並み絵図の復元

「中在家町町絵図」（尼崎市立地域研究史料館〔以下、史料館〕所蔵梶廣子氏文書）は、城下町尼崎を構成する町の一つである中在家町の、近世末期における屋敷地の間口・奥行とその所有者が記された、当時の町を理解するにあたって欠かせない基礎史料です。しかし、原史料は上下二冊の書札形態で、町内全体を一度に把握することができませんでした。そこで、「尼崎の近世古文書を楽しむ会」の会員である島原典子さんと公手博さんの手により同絵図の解読と空間復元がなされ、手書きの復元絵図が完成しました。このような市民の方々が取り組まれた成果をさらに地域の歴史研究のコンテンツとして広く公開し、また誰もが容易に活用できるように、二〇〇三年以降史料館と当センターとの共同研究として同復元絵図のデジタルデータ化が進められました。その成果は二〇〇五年六月四日に開催された講座「地域の歴史コンテンツづくりの可能性―完成した中在家町町なみ復元絵図デジタル版―」（於・尼崎市総合文化センター）で発表され、研究者をはじめ、多くの市民の方々の反響を呼びました。

尼崎市制九〇周年事業

二〇〇六年、尼崎市制九〇周年事業・『尼崎の歴史展』の展示作業を、当センターが尼崎市立地域研究史料館、尼崎市教育委員会歴博担当（当時）と連携して行いました。展示は、第1部は古代～近代の通史展示、第2部は市制施行後の尼崎の歴史、第3部は尼崎の市民がつくる歴史展示の三部構成でした。第1部の中世の展示については、神戸大学文学部の日本史演習において著名な尼崎の寺院のひとつである大覚寺の中世文書をテキストとして学んだ学生有志四名が、演習での成果をもとに展示を企画、中世コーナーの展示パネル、解説シートなどを作成しました。

また、関連事業として、歴史展会期中の一〇月七日に子供向けワークショップ「尼崎の土地の成り立ちと歴史を学ぶ」を企画、開催しました（於・尼崎市立総合文化センター）。同企画は、歴史展における通史展示のコンセプトが、尼崎の土地形成と連動させながら各時代の歴史的事象・事件をとらえるというユニークな内容であったことから、かかるコンセプトの理解を深めることと、学習教材として結実させることを目的として行われたものです。実体視体

験のほか、航空写真による旧道の復元などを行いました。当日は小学生を中心に児童一八名とその保護者、あわせて約三〇名の参加を得ました。また、学習教材として広く活用をはかってもらうために、同ワークショップ企画の内容について、『尼崎市立地域研究史料館紀要　地域史研究』（三七―一、二〇〇七年）に掲載しました。（河野）

『播磨新宮町史』の編纂事業

神戸大学と新宮町（現たつの市新宮町）は、二〇〇二年以降共同研究を行い、その成果として二〇〇五年九月に『新宮町史』史料編Ⅰを刊行しました。当センターは編集作業において収集された史資料の調査・分析、各部会の史料の編纂拠点として大きな役割を果たしました。また、当センターの研究員、教員は部会長として活躍しました。

町史刊行後も地域歴史遺産としての史資料を住民が利活用できるような環境作りに向けて、当センターでは様々な取り組みを行いました。まず各部会ごとに評者を立てて、書評会を開催しました。自治体史の史料編としては珍しい取り組みでした。また研究成果を地域へ還元すべく、執筆した当センタースタッフが新宮文化大学校『つつじ学園』の歴史講座で講師を務め、研究成果を披露しました。

さらに、各部会ごとに研究会を立ち上げ、研究を継続させてきました。

古代史部会の執筆メンバーは、「風土記研究会」を立ち上げ、『播磨国風土記』をテキストとして古代播磨の地域生活史についての研究を進め、その成果を坂江渉編著『風土記から見る古代の播磨』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇七年）としてまとめました。同書は、地域の歴史を学ぼうとする地元の方々の関心に応えるべく、一定の学問的水準を維持しつつも、わかりやすく、かつ親しみ易い内容となっています。

近世史部会は、執筆メンバーを中心に「神戸大学近世地域史研究会」を発足しました。その目的は第一に、『町史』を「つくりっぱなし」にせず活用を目指すことであり、第二に『町史』に掲載できなかった史料を活用する場を作り、その成果を引き続いて刊行していくことです。月に一回開催の研究会には、『町史』執筆メンバーの他、学生・院生・市民の方々など幅広い層が参加しています。この間の研究会の成果は、当センターの平成一九年度事業報告書に、『播磨新宮・池田家史料の紹介』として掲載しました。内容は、新宮を治めていた旗本・池田家の系譜と、播磨地域に関する研究論文です。二〇〇八年度には、『播磨新宮・池田家史料の紹介』改訂版を発行し、各自治体の機関等へ配布しました。現在も引き続き研究会は開催しています。（河野）

神戸市北区淡河における連携事業

神戸市北区の淡河地区において、二〇〇三年度より、淡河町自治協議会、神戸市教育委員会との連携事業を行っています。

淡河歴史セミナー

二〇〇三年以降、年二回のペースで、淡河歴史セミナーを開催しています。第一

回～第一〇回は淡河の歴史にまつわる講演会、第一一回は淡河本町を中心としたフィールドワーク、第一二回は淡河地域の出土遺物の展示会を催しました（表2）。

史料調査

淡河町自治協議会の協力を得て、郷土史家の故下田勉氏が蒐集した史料や、歳田神社に保管されていた淡河本町自治会所蔵史料などの調査を行いました。

歳田神社の調査では、天正七年（一五七九）、同八年の羽柴秀吉制札が発見されました。これらは、地元の一部では、以前からその存在が知られていましたが、これまで本格的な調査が行われたことはなく、今回の連携事業で再発見された形となりました。天正七年制札には、「らくいち」（楽市）という文言が書かれていますが、「楽市」文言が見える制札は全国でも三例目（六枚目）、秀吉のものとしては唯一の事例です。これらの制札は関係史料とともに、兵庫県の指定文化財となりました。

この羽柴秀吉制札と関連して、江戸時代、この制札を伝来していたと考えられる、明石藩の大庄屋村上家の所蔵文書の調査も行いました。このほか、淡河城主であった淡河氏・有馬氏に関連して、久留米藩主有馬家文書の調査なども行いました。

その他

羽柴秀吉制札の再発見にともない、淡河道の駅に、制札の解説パネルを設置しました。また、制札の内容を解説したパンフレットを作成し、淡河地区の全世帯に配布したほか、道の駅などでも配布しました。

また、二〇〇七年、神戸市立淡河中学校の生徒が地域について調査し、発表する「地域学習発表会」に参加し、制札の解説を行いました。

このように調査成果を地域に還元する活動を進めています。（村井）

伊丹における連携事業

猪名川通船・馬借関係史料の解読

二〇〇三年度および〇四年度、伊丹市と

第1回	丹治康明氏	淡河本町周辺の史跡
第2回	小林基伸氏	「有馬氏系図」を考える
第3回	桑田優氏	豊臣秀吉と北神戸地域―淡河町の成立と発達を中心として―
第4回	山上雅弘氏	湯ノ山街道と秀吉の播磨支配―城郭遺構と発掘調査の成果から―
第5回	仁木宏氏	淡河市場・城下町と秀吉の楽市制札
第6回	永田實氏	農村歌舞伎舞台について
第7回	坂本亮太氏	中世の石峯寺と周辺の村々
第8回	山口英正氏	発掘調査から解った竹林寺
	村井正範氏	解体調査から解った竹林寺
第9回	木村修二氏	江戸時代の久留米藩士淡河来訪記
第10回	川野憲一氏	中世の輝き―石峯寺伝来の佛教美術―
第11回	地域連携センター	特別企画「フィールドワーク＆地図づくり　淡河町の戦国を歩く」
第12回	神戸市教育委員会文化財課	展示会「発掘！淡河の遺跡」

表2　これまでの淡河歴史セミナー

の連携事業において猪名川通船関係史料の再調査と史料集の作成を行いました。

猪名川通船関係の記録は川西市・池田市・猪名川町・伊丹市等に残されており、各自治体史で採り上げられていますが、今回は池田市の「蝸牛廬文庫」に蔵されている猪名川通船および馬借関係史料を中心に調査を行い史料集としてまとめました。

ひなまつり@伊丹郷町館

二〇〇三年度、国の重要文化財に指定され、伊丹市中心市街地に保存されている「旧岡田家住宅・酒蔵」の活用および市民へのアピールのためと、この年に伊丹郷町館内に事務局を置く伊丹市文化財保存協会に雛飾りが寄贈されたのを機に、三月のひな祭りにあわせて旧岡田家住宅・酒蔵において「ひなまつり@伊丹郷町館」を開催しました。旧岡田家住宅・酒蔵をどのように活用するかを出発点とし、市域のまちづくりグループや歴史愛好グループに集まっていただき、まずひな祭りにふさわしくと、絽刺し（刺繍）のグループから、打掛けや帯、訪問着、小物などすばらしい作品を出していただき、また伊丹市東野地区の「なんきん桃ブランド実行委員会」から特産品のなんきん桃の展示即売、そのほか、計八グループと市教委、市まちづくり課などの協力を得て、三月三日のひな祭り前後の六日間の展示と二回の伊丹郷町の歴史についての講演会を行いました。

翌年の第二回はひな飾りが三組に増えました。今回は絽刺しに代えて「屏風・ふすまに描かれた四季」をテーマとしました。期間中一回、まちづくり活動についてのシンポジウムを持ちました。パネラーは当センターの奥村副センター長をはじめ地域のまちづくりグループから五人の方々にお願いしました。

二〇〇五年度は、三組のひな飾りと、一九六九年に伊丹市松本公団文化財愛護少年団が自分たちの学習成果を形にしたカルタとそれをもとに作成した伊丹市のイラストマップを中心とした展示でした。自治会から昭和三〇年代の伊丹の風景等のフィルムも上映され、琴・鼓を和楽器屋さんから出展していただくなど、多くの方々の協力によって開催することができました。

四年目から「ひなまつり@伊丹郷町館」は伊丹市文化財保存協会が中心となり、引き続き開催されています。開催期間も長くなり、大きなひな飾りを部屋に置けない住宅事情のなかで、立派なお雛様は市民に喜ばれているようです。

歴史まちづくりトークサロン

二〇〇四年四月二四日、伊丹郷町館石橋家住宅において、地域の歴史資料の保全や歴史文化を活かしたまちづくりを考えるトークサロンを、歴史資料ネットワークと連携して、開催しました。伊丹市域を中心に近隣において歴史・自然を生かしたまちづくりに参加・活動しているグループに声を掛け、取り組みについての指針、課題、抱負などの情報交換を行い、今後の活動の参考や横のネットワークづくりに寄与できればとの趣旨で開催した企画です。

一六の市民グループの代表、伊丹市会議員、同市職員、学校教員等、計二七名の参加を得ました。内容の詳細については「史料ネットNews Letter」三七号（二〇〇四年五月）に紹介しています。

後日、いくつかのグループの交流やボランティアガイドの依頼などもあり、少しずつ広がりもありました。まちづくりに取り組んでいるグループはそれぞれ横のネットワークの必要性を強く感じてはいますが、どのように連携できるかを模索している中でのこのトークサロンは一定の意義があったと思います。

伊丹酒造組合文書の調査・目録作成

伊丹酒造組合は、伊丹市・猪名川町・三田市・川西市の酒造会社五社が加盟する酒造組合です。同組合との連携事業として、現在伊丹市の小西酒造本社内に置かれている事務局に蔵されている組合文書の目録の作成と一部史料の解読を行いました。この史料は、小西新右衛門氏文書（小西酒造）と同質のもので、明治一二年（一八七九）、伊丹酒造組合が結成されたとき、小西新右衛門氏文書のうち酒造仲間に関する一部の史料が分離したものと考えられます。内容は、近世から戦前にいたっています。史料として箱詰めで保管されていたものは目録化しましたが、戦後の書類がダンボール詰めで残されており、二〇〇九年度はこの史料の目録化を予定しています。

酒造家文書勉強会と古酒の復刻

九年ほど前、小西酒造創業四五〇年の記念行事の一環として、当時預かっていた小西新右衛門氏文書によって元禄一五年（一七〇二）に江戸へ積み出された清酒「白雪」を復刻しました。一年ほどの準備期間をとって技術の方々と勉強会を持ち、頭をひねりながら出来た酒は、以来販売されています。これが契機となり、自社にこのような史料があることをはじめて知り、それを活用した酒造りができるということに興味を持たれた社員の方たちが古文書の勉強をはじめたいと、二〇〇三年「小西新右衛門氏文書」・「伊丹酒造組合文書」を中心とした勉強会がはじまり、二〇〇五年から、史料を検討し、文政八年（一八二五）の「白雪」の再現に取り組みました。

元禄の酒からおよそ一二〇年後の酒の味は、史料の上から元禄の酒とは違った味であることは推測できたのですが、出来上がった酒は予想以上に現在の酒に近いもので、元禄の酒との違いに驚いたものです。

史料に記されたことがこのように如実に再現でき、販売にまでいたるという貴重な経験は古文書の研究では得がたいものです。このような酒造りは、当家に史料が残され、当時の場所で今も操業し、かつ、この酒を造ってみようという会社の意志がそろってはじめてできたことです。古文書勉強会に参加されている方たちも古文書にある種の新鮮さを感じながら、史料が実際に生かせるものであることを認識され忙しいなか勉強会は続けられています。

文政の酒が出来た後、二〇〇七年二月、白雪長寿蔵ミュージアムにおいて、毎月開催されている「伊丹歴史探訪」のなかで、シンポジウム「古代の酒から現代の酒へ」が催され、小西酒造の技師、当センターの研究員がパネラーとして参加しました（入場者一五五人）。

御願塚における連携事業

伊丹市域の南部、御願塚地区に残る古墳時代中期の帆立貝式前方後円墳は県・市の指定文化財になっており、御願塚史跡保存

会が中心となって古墳のまわりの環境整備や保存、また他地域の古墳の見学会などを行っています。史跡保存会とかかわりを持つようになり、古墳だけでなくまちづくりを考えようと提案したことから、古墳を中心に地域の情報誌が発行され、次に地域のイラストマップづくりがはじまりました。

この地区は一九七五年の山陽新幹線の開通にともない、旧集落が南北に二分され、寺や神社が移転し、村のかたちが大きく変わりましたが、かつての面影を多く残している地域でもあります。

マップの作成委員は六人、毎月一回夕方から地域の神社の社務所で例会を開いています。マップ作りは今年で三年目を迎え、マップのタイトルやレイアウト、掲載記事・写真、イラストレーターなどもほぼ決まり、秋には完成させたいと思っていますが、マップの完成が終わりではなく、地域内外へのお披露目や今までの作業で収集した聞き取り事項、新たに発見した事物等々の報告会や、地域の古文書、古い生活道具の展示会を開き、御願塚情報を地域内外に発信し、御願塚を考える機会をつくって行きたいと話し合っています。（石川）

朝来市との生野町における連携事業

概要

二〇〇三年一一月に、旧兵庫県朝来郡生野町教育委員会から当センターに生野書院保管の古文書の再整理の依頼を受けたことを契機に連携事業がスタートしました。生野町は鉱山で栄えた町として長い歴史を持っています。生野書院には生野代官所関連文書ほか、近世の生野町、さらに周辺の村々の様子や人々の暮らしがわかる史料が多数保管されています。古文書の再整理事業は、これらの文書を町民の方々にとってより活用しやすいものとするように進められてきたものです。

二〇〇五年三月、旧生野町と神戸大学は地域連携事業を進めるため「連携協力に関する協定」を結びました。同年四月以降、旧生野町は合併して朝来市となりましたが、この協定は新市に引き継がれました。以降、定期的に、神戸大学の学生と町民の方々が一緒になって史料の整理を行ってきました。成果は、古文書講座や展示などのかたちで、町民の方々に公開してきました。

そうしたなかで、あらたに初心者の方々が自主的に集まって「古文書初級教室」を組織し、古文書を整理するだけでなく、内容を読み解いていく活動も始まりました。現在でも月二回、一五名程度が生野書院に集まり、「銀山旧記」など江戸時代の古文書を読み進めています。神戸大学との「連携協力に関する協定」は、二〇〇八年三月に期限をむかえましたが、その後も地域連携センターでは、朝来市教育委員会や「古文書初級教室」をはじめとする市民の方々と協力しながら、生野書院文書を中心として地域にのこされた史料の活用と保存について考えていきます。

二〇〇八年度の事業

朝来市生野町と神戸大学の「連携協力に関する協定」は、二〇〇七年度に三年目という区切りをむかえました。よって、二〇〇八年度は、前年度までの経験と成果

を活かし、新たな方向性を見出すことを意識しながら事業を展開しました。

■石川家文書の整理

生野銀山南の旧森垣村に位置した石川家が所蔵する古文書の整理を開始しました。石川家は、江戸時代から龍野屋という屋号で宿屋や薬屋を営みながら、大庄屋や本陣をつとめ、大正期以降は醤油屋を営んだ巨大地主・商家です。また生野代官所役人や町内の山師・郷宿・掛屋とも縁戚・金融関係をもち、互いに銀山・代官所の経営をめぐって連絡を取り合うなど、鉱山の近郊農村にありながら、生野銀山・鉱山町とも深いかかわりを持っていました。整理は、ご当主が古文書を蔵から少しずつ持ち出すかたちで、生野書院で行いました。多くの土地証文や鉱物の津出を記録した巨大な帳簿、鉱山町内とのやりとりを示す書翰、さらに行方不明とされていた当主による日記など、同家の多角経営を反映して多種多様な文書を確認しています。ただし、これらは現在非公開です。

■シンポジウムの開催

二〇〇九年二月二八日〜三月一日、朝来市生野マインホールにおいて、シンポジウム「生野の歴史再発見―森垣村石川家と生野銀山―」を開催しました。これは、生野の方々に石川家文書にふれてもらいながら、整理を進めるなかで明らかになった生野銀山の歴史や、同文書群の意義について考えてもらうことを目指したものです。

まず、石川家文書の整理を進めるなかで明らかになった史実を、生野町の方々に還元するために講演会を開催しました。石川家の歴代当主について、同家の掛け軸に描かれた肖像や墓碑銘、過去帳などから詳細に分析し報告しました。石川家の方々にとっては、先祖の事跡が具体的に明らかにできるという意味において有意義な内容でした。また、今後、石川家文書の整理を進めていく上で必要な基礎的情報を得ることができました。

次に、石川家文書の整理を、生野町の方々と神戸大学の院生が協同で行いました。今回は、整理未着手のものを使用しました。桐箱に入った古文書の保存状態をデッサンしながら記録し、整理を行い、もとの桐箱に戻すという一連の作業を体験しました。

最後に、石川家が輩出した歴史家である石川準吉氏のご子息と、石川家ご当主に講演していただきました。準吉氏のご子息には、準吉氏の官僚と歴史家、両面の功績について、父親としての素顔も紹介しながら説明していただきました。一方、ご当主には、実際に手元に残っている古文書や道具類を披露しながら、大商家ならではの経験や歴史、さらには古文書を所有している家の苦悩や、古文書を保存することの意味について語っていただきました。最後は、サロン形式にし、参加者が実際に資料を手にとって、ご当主と語らう場面も多くみられました。

なお、シンポジウムにあわせて、二月二八日〜三月二二日に生野書院展示室において企画展「生野代官所の世界」を開催しました。これは、『生野史』の記述を、より分かりやすいかたちで市民に紹介するために開催したものです。生野代官所や地役人の概要についてまとめたパネルを四枚、古文書を一〇点展示しました。

本シンポジウムは、石川家が輩出した歴史家である石川準吉氏の生誕一〇〇周年と

いうことで、同氏の功績をたどり、市民に石川準吉という人物を知ってもらうことで、石川家文書の歴史的意義を広く知ってもらうことを意図しております。今後、新出資料である石川家文書を整理・活用することを通じて、地域の歴史の掘り起こしをすすめていきます。（添田）

『香寺町史』の編纂事業

『香寺町史』は、二〇〇五年三月に「村の記憶」（地域編・資料編）が刊行され、その「地域編」の執筆は香寺町に住む人たちが中心となってなされました。現在は「村の歴史」（通史資料編・通史編）の編纂が行われており、そのうち「通史資料編」は二〇〇九年三月に刊行され、「通史編」は二〇一〇年三月に刊行予定です。現在編纂中の「村の歴史」は、歴史を専門とする研究者を中心に執筆されています。内容は、考古・古代・中世・近世・近現代・民俗からなっています。

「村の記憶」（地域編）は特色ある自治体史であると同時に、地域の歴史文化を地域の方々自らが研究して町づくりに活かしていく方向性を持ったものであり、当センターの事業の柱の一つである「自治体・地域住民と連携した新たな自治体史編纂や地域歴史博物館形成事業」と密接な関係を持っています。香寺町の歴史文化が地域に根付き、今後住民によって活かされていくことを目指して、当センターはその編纂事業に協力しています。

以上のように、『香寺町史』は、本の完成によってではなく、刊行後に利用されることによってその意義が深まるものです。香寺町は二〇〇六年三月に姫路市と合併しましたが、香寺町域に住んでいる人びとが今後も町域の歴史を考えつづける際に、『香寺町史』がそのきっかけ・助けとなることを目標として今後の編纂事業も進められていく予定です。（深見）

三田市における連携事業

三田市との関係では、当センター事業責任者と担当教員一名が、『三田市史』全一〇巻（ほかに別編二冊）の編纂・刊行事業に協力しています。事業責任者は編集委員として全巻の編集・刊行に関わると共に近代編の調査・執筆を担当し、担当教員は近代編の調査・執筆に従事しています。近代編は第五巻（近代資料Ⅰ）が二〇〇五年に、第六巻（近代資料Ⅱ）が二〇〇七年に刊行されました。近代資料Ⅰは「三田市域の史料から日本近代史を学ぶことができる」（「監修のことば」）ことを狙いとし、中学校・高等学校の授業でも活用できるよう、詳しい解説を付ける工夫がなされています。また、近代資料Ⅱは一一のテーマを立てて史料を配置し、日本近代史研究の立場から史料について論じる長めの「資料の概要」を付しました。それぞれの刊行後には、市の主催による「市史を読む会」で資料解説を行うなど、普及・活用にも取り組んできました。現在は、本文編の執筆に向けて、執筆者相互に進捗状況を確認し合いながら調査を進めているところです。

このほか、三田市内にある兵庫県立三田祥雲館高校及び三田市と連携して、地域歴

史遺産を活かした地域づくりを考えるセミナー「祥雲館文化セミナー」の構想が具体化しつつあり、二〇〇八年二月二〇日には同校で最初の講演会「地域の歴史文化遺産から地域づくりを考える」が開催され、事業責任者が講演を行いました。（河島）

神戸市北区山田町藍那における連携事業

本事業は、二〇〇四年五月、国営明石海峡公園神戸地区（以下神戸地区。二〇一二年度一部供用予定）の整備に伴う、国土交通省近畿地方整備局国営明石海峡公園事務所からの受託研究事業として始まりました。神戸地区は、神戸市北区山田町藍那地区の里山を園地に、「農業空間として維持されてきた豊かな里山を、守り育てながら身近な森としての活用を図る」という基本方針のもと、里山の自然・景観・歴史文化を活かした公園を目指して整備が進められています。これを受けて、本事業では、藍那地区、とりわけ里山の歴史的環境の変遷を明らかにするとともに、その成果に基づき、神戸地区における歴史的遺産の活用のあり方についての提案を行うことを主たる目的として調査研究を進めてきました。

受託研究の最終年度となった二〇〇七年度までに行ってきた事業内容は以下の通りです。まず、調査として、藍那地区に伝来した、総点数六千三百点余に及ぶ「藍那村文書」を始めとする史料調査、地名・耕地・水利・生業等に関する地区住民からの聞き取り調査、藍那の里山景観の大きな特徴となっているため池や古道等の現地踏査を実施しました。そして、これらの調査をふまえて、神戸地区内のため池や古道に関する研究、同じく江戸時代～現代の景観変動の研究、昭和三〇年代の藍那地区の生業の復元研究等を行いました。さらに、こうした調査研究成果の神戸地区への活用・還元として、ため池を含む様々な歴史的遺産に掲示する看板や古道のウォーキングマップ等を作成・提供したほか、神戸地区内で例年行われているイベント「あいな里山まつり」（主催：あいな里山まつり実行委員会／国営明石海峡公園事務所）に参加、調査研究成果を紹介するパネルの出展、研究報告、歴史ハイキング等を行いました。また一方で、ほぼ毎年、藍那地区の公民館で地区住民向けの研究報告会を実施し、地元の方々への調査研究成果の還元にも努めてきました。

先に触れたように、本事業は、受託研究事業としては二〇〇七年度をもって終了しましたが、この間に得た、藍那地区の歴史に関する調査研究成果の蓄積と地区住民の方々とのつながりを活かすべく、二〇〇八年度以後も、当センター独自の事業として継続されることになりました。そこでは、公園事務所・神戸地区との協力関係も維持しつつ、藍那地区との連携事業としての展開を目指しています。二〇〇八年度は、前年度に引き続き、史料調査・聞き取り調査・現地踏査と「あいな里山まつり」へのパネル出展を行うにとどまりましたが、二〇〇九年度には、これらに加え、藍那地区での研究報告会と、地区の方々と連携しての神戸地区での市民向け講演会の実施を予定しているほか、大学で藍那地区をフィールドとした講義（現地見学を含む）を組むことも検討しています。（森田）

神戸市灘区との連携事業

二〇〇四年一二月、神戸市灘区と神戸大学は、まちづくりを始めとする諸分野において相互に協力し、地域社会の発展や活性化に寄与するため、連携協力に関する協定を結びました。この協定に基づき、当センターとしても積極的に灘区との連携活動を進めてゆくこととなりました。

二〇〇五年度は、灘区まちづくり推進課（現まちづくり課）と連携し「篠原の昔と今―古文書と古写真―」と題した展示会を企画・開催しました。篠原地区に遺されていた昭和初期の古写真を中心に展示を行い（第Ⅰ期・灘区民ホール、第Ⅱ期・篠原会館別館）、さらに篠原地区関係の古文書と古写真とを併せた展示（第Ⅲ期・神戸大学百年会館展示ホール）も行いました。篠原地区の方を中心におよそ千二百名もの方々が観覧されました。また展示会にあわせて制作した冊子『古写真にみる篠原の昔と今』『篠原の昔と今―古文書と古写真―』は、展示会後も配布希望が絶えませんでした（現在配布終了）。



『水道筋周辺地域のむかし』

二〇〇六年度は、冊子『水道筋周辺地域のむかし』の制作を進めました。大正時代以来西灘地域の商業の中心地として発展してきた水道筋商店街がまだ存在しなかった江戸時代から明治時代を中心とする地域の歴史の読み物として制作しました（現在も配布中）。この冊子発行を基礎に、二〇〇七年度には、灘地域アカデミーとして水道筋地区の地元での三回にわたる連続講座（フィールドワークを含む）に当センター研究員が講師として参加するなど、水道筋との関わりはなおも継続しています。

灘区と本学が連携し、双方の利点を活かしつつさまざまな活動を行なってゆくことは、区政の充実という点でも、また大学が取り組むべき地域貢献の具体化という点でもたいへん意義あるものと考えます。当センターとしても、引き続き灘区役所や灘区民の方々との連携活動に積極的に取り組んでゆき、これまでの近くて遠かった区民と大学との〈距離〉を縮めるべく、努力して参りたいと考えています。（木村）

小野市との連携事業

小野市と神戸大学との間では、『小野市史』全八巻の編纂事業への執筆・協力など、以前から一定の連携関係がありました。これを踏まえ二〇〇五年一月には、「生涯学習や文化遺産の活用をめぐる相互協力」に関する包括協定が結ばれ、それ以来、毎年秋に開かれる小野市立好古館（歴史系博物館）の地域特別展を共同開催するなど、いくつかの事業がすすんでいます。

このうち地域特別展は、小、中学生たちが地元の方々とともに、地域の歴史文化を調べ学習し、館内でその成果を展示するという、たいへんユニークな企画です。地域

コミュニティーの再生をはかる手法の一つとして、全国的にも注目されています。この展示会に際しては、当センターの教員や研究員らが、自らの専門的知識を活かした研究調査をして、歴史文化の掘り起こしを行うと共に、博物館の学芸員をめざす本学の学生・院生が、子供たちと一緒に「地域調べ学習」に参加・協力し、貴重な博物館実習の経験を積んでいます。

また二〇〇八年九月には、それまでの連携事業の成果を踏まえつつ、共同してオーストリアのウィーンにて、「青野原俘虜収容所里帰り展覧会」と「演奏会」を開きました。地域での地道な取り組みが、国際的な企画にも発展した事例として評価できると思います。今後は、新たに発見された「青野原収容所」関連の歴史資料の分析を深めつつ、東京などでの展示会の共同開催などを計画しています。（坂江）

国土交通省神戸港湾事務所・NPO法人「近畿みなとの達人」との連携事業

国土交通省神戸港湾事務所およびNPO法人「近畿みなとの達人」との連携事業は、二〇〇五年五月、神戸大学で開催された日本西洋史学会第五五回に遡ります。この時、「神戸歴史舞台―西洋社会との出会い、震災と史料保存、そして未来―」と題する特別企画シンポジウムと関連展示会が催され、当センターや港湾事務所などの関係者が、いくつかの報告を行うと共に、共同して関連資料の展示を行いました。

それ以来、二〇〇六～〇七年度には、みなとまちづくり生涯学習講座やシンポジウム開催への協力（講師派遣等）、尼崎・神戸・兵庫・東神戸四港の「みなとまち絵地図」作成への協力等、様々な連携事業を行いました。（坂江）

『越前町織田の歴史』の編纂事業

当センターと福井県越前町織田（旧織田町）との間では、二〇〇五年度に共同研究の契約が結ばれ、同町内の歴史遺産を保全・活用していく事業のほか、町史編纂をめぐる共同研究が始まりました。二〇〇六年度には、この一環として、当センターの奥村弘が、現地で歴史記念講演を行うとともに、町史の編纂作業を開始し、二〇〇六年一二月には、当センターに関連する研究者等が分担執筆した『越前町織田の歴史』（古代・中世編）が刊行されました。また翌年の二〇〇七年度には、当センター研究員が『織田町史　史料編』中巻（一九九六年）に所収されている史料を用いて、専門論文を『越前町織田文化歴史館館報』に寄稿するなどの協力も行いました。（坂江）

『新修神戸市史』の編纂事業

『新修神戸市史』編纂事業は、一九八二年に編集委員会が設置され、神戸市文書館を中心に編纂・刊行を進めてきましたが、阪神・淡路大震災などの影響により、一時期中断していました。しかし、二〇〇六年度から、「歴史編Ⅱ古代・中世」の基礎調査と成果の普及活動に関する業務について、当センターが委託を受け、編纂事業が再開されました。

当センターでは、基礎調査として、神戸市域を中心に史料調査などを進めています。調査で撮影した写真を神戸市文書館で閲覧できるようにし、多くの方が史料を利用しやすい環境を整えていく予定です。こうした市民の方々や研究者の閲覧・利用に配慮して、史料調査に際しては、中世の史料だけではなく、近世や近代の史料についても調査を行っています。さらに成果の普及のために、調査成果を活かした講演会や展示会の企画、『新修神戸市史』のwebページの作成などを行っています。

二〇〇六年には、神戸市文書館・神戸市教育委員会・新修神戸市史編纂委員会の主催で、展示会「中世石峯寺の古文書と出土品」を、神戸市文書館において開催しました。また、二〇〇八年には、同じく展示会「神戸の中世再発見」を開催しました。二〇〇六年の展示会では、市史の調査で発見された石峯寺（神戸市北区）の中世文書などを展示し、二〇〇八年の展示会では、同じく新出の「神戸市北区山田出張所旧蔵文書」から、中世文書などを展示したほか、長く京都大学に寄託されており、数十年ぶりに神戸市に里帰りした押部谷小学校蔵・神戸市立博物館保管「蒔絵桜花南蛮人文絵鞍」を展示しました。これらの展示会の期間中は、当センターの研究員や、本学の大学院生が常駐し、展示解説を行ったほか、二〇〇八年度には市民向けに展示史料を用いた古文書講座も行いました。

このように、調査成果を市史の執筆に用いるだけでなく、編纂を進めながら、成果を公開し、多くの人が、刊行された市史だけではなく、自ら史料に接することができるようにする、新しい自治体史編纂のモデルを構築する試みを進めています。（村井）

神戸市文書館との連携事業

本事業は、二〇〇六年度、神戸市文書館から当センターに対して市民向けレファレンス対応への協力要請があったのを契機に、地域歴史資料の収集整理及びレファレンス対応も含めた公開・普及・活用方法に関する共同研究事業として開始されました。以来、当センターから派遣された研究員や本学大学院生等が開館日（月～金）の午後、館に常駐し事業に従事しています。

事業内容としては、二〇〇六年度は、初年度でもあり、要請のあったレファレンス対応を中心に、古文書や図書の閲覧対応等を行うにとどまりましたが、二〇〇七年度には、レファレンス対応も行いながら、共同研究の趣旨にあわせて事業内容を拡大し、未整理古文書の整理、館蔵資料（古文書、古文書・新聞雑誌等のマイクロフィルム、行政文書、古写真等）のデータベース整備や閲覧制度の改善等に着手しました。さらに二〇〇八年度には、館蔵資料の公開・普及のための新たな試みとして、館蔵古文書を用いた企画展（「井上善右衛門家文書展」）を行い、多くの来場者を得ました。

二〇〇九年度は、前年までの事業を継続すると共に、新たな事業として、神戸市役所内に保存されている阪神・淡路大震災関連資料の調査・整理にとりかかる予定です。こうした事業を通じ、神戸市文書館が、地域資料を収集・整理・保存・公開という、地域の中で果たすべき役割を充分に発揮できるよう協力に努めています。（森田）

丹波市における連携事業

棚原区パワーアップ事業推進委員会・棚原自治会との連携事業

丹波市春日町棚原地区住民は、地域の寺社や古文書などの地域歴史遺産を保護・継承して後世に伝え、まちづくりを行うために「棚原区パワーアップ事業推進委員会」を二〇〇四年四月に結成しました。地区内の古文書の整理方法・解読法や、歴史遺産の活用方法について相談を受けた当センターは、二〇〇八年二月から翌年七月まで、地区の庚申堂に保管されている自治会所蔵文書の調査・整理作業を、棚原地区住民や丹波市教育委員会と共同で進め、寛永四年（一六二七）から現代までの文書約一〇〇〇点の目録を取り終えています。

目録の作成後、住民に成果を還元せず、大学に研究成果のみを持ち帰るというかつての大学の史料調査スタイルの反省に立ち、史料を守り続けた先人と今後も守り続けていく現在の住民の両者を意識した活動を行ってきました。「古文書は読めないから捨てられる。捨てられるから地域の歴史が伝わらない」という悪循環から脱し、史料の来歴と中身を知り、利用していくことが保全へと繋がっていくと考え、庚申堂で保管されていた自治会所蔵文書を地区住民とともに解読していく「古文書を読む会」を開催しました。また、将来まちづくりを担っていく次世代の子ども達へ地区の歴史を語りついでいくために、会の研究成果を、小中学生や保護者向けに解説する「ふるさと棚原をもっと知ろう親子講座」を開催しました。これらで明らかとなった地区の歴史に関する成果は、パンフレット「ここまでわかった棚原の古文書　パートⅠ・Ⅱ」として棚原地区全戸に配布しています。

二〇〇七年度までは、地区住民の有志による「棚原区パワーアップ事業推進委員会」が主催してきましたが、二〇〇八年度からは、「棚原自治会」が主体となってパワーアップ事業に申請し補助金を得ています。そのため、二〇〇七年度よりも一層地区住民と一体となった活動が可能となりました。二〇〇八年度は、「棚原の歴史をめぐる里山公園づくり」事業を同自治会がたちあげ、当センターはそのコンテンツづくりに協力しました。具体的には、天満宮神像調査・各史跡の伝承研究・進修小学校や氷上特殊支援学校との連携・三大大池の活用策の検討・展望台設置のための立地調査・久下家文書に伝わる農書からの伝統農法復元のための基礎的調査などを行いました。また、進修学校林の整備も行い、公園作りに向けての準備期間となりました。

丹波市との連携事業

住民と共同での古文書整理と内容の解説・展示・普及といった「棚原モデル」の成果は、地区住民の文書に対する保管意識の向上や、地区の歴史に対する内容理解の更なる深化という形で現れてきました。このような「棚原モデル」の取り組みが高く評価された結果、二〇〇七年八月には、丹波市域の歴史文化遺産の調査・研究・保全、またそれらの活用による地域活性化や、活用しうる人材の育成に貢献することを目的として、「丹波市と神戸大学大学院人文学研究科との地域活性化の連携協力に関する

協定」が締結されることとなりました。

この協定に基づき、当センターは丹波市教育委員会と共同で、地域住民の協力を得ながら、自治会や旧家・寺社などが所蔵している歴史資料の所在確認を行い、丹波市の歴史を総合的に研究するためのデータ整備や史料の保全・活用体制を構築することをめざしています。二〇〇七年度より山南町の調査を開始し、町内一七地区の区長を対象に、自治会などで所蔵されている古文書・古写真や建造物、その地域の歩みをしめす地域の歴史遺産の有無、保存状況、調査歴、寄託希望の有無についてアンケート調査を行いました。調査希望のあった自治会を中心に現地調査を行い、その調査成果は、現地説明会を開催することで地区住民への周知をはかっています（若林地区）。

二〇〇八年度は、若林地区のように文書調査と現地説明会をセットで行えるモデル地区を普及すべく山南町内の自治会・神社・個人宅を訪問調査しました。町内古文書については、郷土史家の和田晴夫氏により調査済みのものが多かったのですが、近代史料を中心に未把握の文書が発見されたこと、自治会文書調査を契機として個人蔵の文書調査依頼が増えたこと、自治会文書のもつ重要性を地区住民に周知しつつあること自体は評価できるでしょう。但し、月に一度の訪問ペースでは、全自治会の悉皆調査は困難で、また若林モデルを積極的に実践してみたいと希望する地区も少なく、二〇〇八年度当初目標のモデル地区づくりという点では課題が残りました。しかし、その中でも、奥自治会では、史料解説の要求もあり、地区住民の文書への関心は高いものがあります。和田地区の木戸せつみ家から借用している古写真なども興味を引く素材であるために、ともに史料展示・現地説明会を開催する予定です。（松下）

神戸市東灘区住吉地区における連携活動

財団法人住吉学園では、住吉地区の歴史を明らかにし、とりわけ地区の子供達にそれを伝えていくことを希望されており、そうした趣旨から、二〇〇六年度より住吉学園を中心とする東灘区住吉地区と当センターの関わりが始まりました。

住吉地区には、一九四六年に発行された『住吉村誌』（武庫郡住吉村発行）、及び一九六七年発行の『続住吉村誌』（住吉学園発行）とがありますが、後者からもすでに四〇年以上の時が経過し、この間に住吉地区がたどった歴史をまとめようという機運が地区住民の一部に生まれてきています。さらに、住吉地区に関する新たな史料の所在確認も徐々になされてきているので、住吉学園、地区住民、さらに当センターと連携協力する形で、『新住吉村誌（仮）』の発行を模索しています。その準備の意味も込めて目下、主に本住吉神社（もとすみよし）境内にある資料館をベースに、地区住民の方々と文献資料の調査や住民からの聞き取り調査など様々な取組を展開しています。（木村）

福崎町との連携事業

福崎町との連携は、教育委員会文化財課から、町内の㈶柳田国男・松岡家顕彰会記念館の所蔵資料、特に柳田国男の民俗学関

連資料、松岡映丘の美術関連資料の整理・目録作りに関する協力要請が当センターにあったことを契機としています。これを受けて、美術関連資料の整理事業を大学として協力することとし、二〇〇七年一二月に大学と記念館との「共同協力研究」型の調査事業契約を結び、人文学研究科美術史専修（百橋明穂教授・宮下規久朗准教授）のメンバーが同資料の調査・研究を行いました。

二〇〇八年度は、福崎町立神崎郡歴史民俗資料館の連続講座「地域の歴史遺産を見つけよう～郷土への誘い～」（三回分）に当センタースタッフを講師として派遣し、協力を行いました。講演会は表3の通り。

第1回	5月24日（土）	奥村弘「地域歴史遺産とは～文化財の新しい見方を考える～」
第2回	7月19日（土）	河野未央「水害で被災した史料の修復ワークショップ」
第4回	11月22日（土）	松下正和「地域の歴史遺産を活かしたまちづくり～丹波市での事例を中心に」

表3　連続講座講演会

奥村報告では、「地域歴史遺産」とは何か、地域の文化財を取りまく近年の新たな状況や、指定文化財だけではない地域の歩みを示す未指定文化財を含めた地域の歴史遺産を活用の方法などについてふれました。河野研究員による水損史料修復ワークショップでは、「地域歴史遺産」としての史料が水損した場合の応急処置法として、ペーパータオルによる吸水乾燥の実演が行われ、参加者も一緒に吸水乾燥を体験することができました。松下報告では、この「地域歴史遺産」を活用したまちづくり例として、丹波市の事例を中心に紹介しました。特に、地区の庚申堂に残る史料を地元の方が中心となって、整理・解読・発表し、その成果をパンフにして地区の全戸に配布したり、展示施設で資料を紹介したりする取り組みの有効性（棚原モデル）について解説を行いました。本講座の参加者は、町内の各地区から参加があり、地域的偏りなくまちづくりに熱心なのが特色だと感じました。二〇〇九年度以降は、町内の中でも活発な活動を行っている辻川地区との連携事業へ協力を行う予定です。（松下）

加西市との連携事業

当センターでは、加西市教育委員会市史・文化財室と共同して、「鶉野飛行場関係歴史遺産基礎調査」を、二〇〇九年一月（二〇〇八年度）から三か年にわたって行っています。内容は、文献調査、聞き取り調査、現地実測調査による学術基礎調査です。また、これらの調査を踏まえ、保存活用の方策をさぐっていきたいと考えています。

加西市にある神戸大学大学院農学研究科附属食資源教育研究センターの敷地内及びその周辺地域には、滑走路をはじめ、海軍姫路航空隊基地の施設跡や川西航空機鶉野製作所の遺跡が多く残っています。近年、これら第二次世界大戦期の戦争遺跡も、近代遺跡の一つとして重要な地域歴史遺産の数えられるようになってきています。戦後六〇年をすぎ、当時を覚えている人からお話をきける最後の機会です。近隣住民の眼からみた「鶉野飛行場」について、お話をうかがい、きちんと記録しておきたいと思います。（佐々木）

羽束の回廊歴史フォーラムへの参加

「住吉大社神代記」の住吉大社解に、川辺郡為奈山の北界として「限北公田並羽束国堺」とみえることから、「羽束国」とは川辺郡六瀬谷から有馬郡高平谷にかけての地域呼称だったと考えられています。この古代の「羽束国」の領域に関連する自治体の文化財担当職員と地区住民代表が、現在の行政の枠を超えて集い、羽束地域の南北及び東西幹線交通軸の復元を通じて歴史的な地域間交流を再発見し、当該地区の遺産を広く知ってもらうことを目的として、歴史地図作成事業を二〇〇八年度よりスタートさせました。参加者は、宝塚市萬正寺住職、三田市教育委員会生涯学習課印藤昭一氏、猪名川町ふるさと館末松早苗氏、宝塚市立中央図書館七條美樹氏、能勢町教育委員会生涯教育課重金誠氏です。当センターからは、奥村と松下が参加し、コンテンツ選定やHP作成、地域住民との連携方法について情報提供を行っています。

二〇〇九年度は、「羽束国」の領域内で、『摂津名所図会』に掲載されている史跡を、二万五千分一の地図上に位置情報や史跡解説、写真などを載せ、HPにて公開することを目標とし、完成次第、当センターのサーバーにアップする予定です。（松下）

猪名川町公民館との連携事業

二〇〇八年八月に猪名川町中央公民館からの依頼で、二〇〇九年度（二〇一〇年にも開講を予定）に当センターのスタッフを中心とした、地域の歴史に関する生涯学習講座（二〇〇九猪名川町生涯学習カレッジ「リバグレス猪名川」）を行うこととなりました。二〇〇九年の五月から一年間、二週間に一度のペースで実施する予定です。内容は、猪名川町域に関する古代から近代のあゆみについての講義と、多田銀銅山など猪名川町内の歴史遺産の見学および町内の古文書を活用した実習を予定しています。当センターでは、この講座を通して、地域の方々が地域歴史遺産について継続して、学び活用できる方法をさらに実践的に深めていきたいと考えています。（奥村）

その他

宝塚山本地区との連携事業

二〇〇八年八月、山本共有財産管理組合より宝塚市立図書館市史資料室を通して、宝塚市山本地区に残る地図その他の史料をまちづくりに活用できないかという話が当センターに持ち込まれ、二〇〇九年の秋、あるいは二〇一〇年四月の植木祭りにあわせ地域の「あいあいパーク」で史料の展示を企画し、市史資料室にも協力を依頼しました。あいあいパークでの展示会はまだ具体像ができていませんが、二月に開催される組合の総会の後、山本地域の近世の交通についての講演を行いました。

秋あるいは来春の事業については、事前の勉強とともに、植木祭りの内容や会場の状態なども含めてこれから詰めてゆくことになりますが、宝塚市の場合、今回の山本地区に限らず、市民の古文書研究会（震

災直後、史料ネット主催の市民講座から出発）等においても、今の市史資料室の担当の方の積極的な協力によって動きやすい環境がつくられていることを感じます。（石川）

淡山疎水資料の調査

淡河川山田川疏水（淡山疏水）は、明治二四年（一八九一）に最初の工事が完了した、四市一町（兵庫県神戸市・三木市・明石市・加古川市・稲美町）にわたる大規模な用水路です。貴重な産業遺産として、二〇〇七年度より兵庫県教委と関係市町教委の間で淡山疏水検討会が組織され、文化財指定・登録を念頭に、詳細な調査が進められています。同会の要請を受け、当センターは、二〇〇八年三～四月に稲美町教委が行った淡山土地改良区事務所所蔵資料（文書・実物資料等）の二〇〇七年度調査に、資料の調査・整理方法についてのアドバイスと、作成された資料カード・目録のチェック作業で協力しました。（森田）

「神戸いかなごくぎ煮学認定試験」への協力

神戸市水産会［神戸市漁業協同組合、兵庫漁業協同組合、財団法人神戸みのりの公社、及び神戸市］は、神戸市名産のイカナゴの釘煮をアピールするために、二〇〇九年三月一五日「神戸いかなごくぎ煮学認定試験」を実施しました。当センターは、同会からの要請に基づき、受験者配布用テキスト作成および問題作成に協力しました。第一回目となった今回の試験では、受験者が一〇五名、うち合格者は九二名という結果でした。設問数は、選択問題が七五問、記述が一問でした。なお試験後のアンケートでは、二九名の方が問題が難しいと答えられ、また今後中級編があれば受験したいですかという質問に対しては、受験者のほぼ半数の五六名が受験したいと回答されています。今後は、こうした声に応え、テキストや設問づくりに工夫を加えてゆきたいと考えています。（木村）

歴史資料と災害
資料の保全・活用

阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

一九九五年一月一七日におこった阪神・淡路大震災では、「震災やその復興に関する資料・記録（以下震災資料）」を収集保存していこうという動きがはじまりました。こういった動きは、図書館、ボランティア団体、文書館、兵庫県外郭団体などで、それぞれが行ってきたものです。その結果、現在では、「震災資料」の収集機関として、神戸大学附属図書館震災文庫、人と防災未来センター資料室、震災・まちのアーカイブ、人・街・ながた震災資料室など、さまざまな名前があげられます。

現在、最も多く「震災資料」を所蔵している、人と防災未来センター資料室では、一九九五年一〇月からはじめられた兵庫県の資料保存活動の成果を収蔵しています。

なかでも、二〇〇〇年六月から二〇〇二年三月まで行われた、大規模な資料調査活動の結果、約一六万点余の資料や約一二万点の写真が複製を含め、集められてきました。

「震災資料」は、同時代史の現代資料です。また、収集当初から、この災害の経験を伝えたいとの思いから、早くから公開・活用が急がれる資料でもあります。これらの資料の保存・活用については、これまでどの資料機関にもそのノウハウはなく、一つ一つ経験を通して積み上げていく必要があります。ところが、人と防災未来センター資料室は、三年期限の嘱託専門員でのみ運営されており、外部からのサポートが必要とされています。そこで被災地にある大学として、神戸大学は、「震災資料」の保存・活用をめぐる課題に取り組むための研究会を、二〇〇二年、当センター開設以来ずっと続けています。（佐々木）

歴史資料ネットワークへの協力

当センターでは、NGO歴史資料ネットワーク（事務局＝神戸大学人文学研究科内、代表＝奥村弘）と連携した地域遺産保全活動や古文書整理事業、及び神戸市内の自治会単位での地域の歴史の掘り起こし事業を推進しています。

同ネットワークは、阪神・淡路大震災発生直後の一九九五年二月に、関西に拠点を置く歴史学会を中心に、震災で被災した歴史資料保全のために結成された「阪神大震災対策歴史学会連絡会」からスタートした組織です。大学教員や院生・学生、史料保存機関職員、地域の歴史研究者などが参加するボランティア団体で、一九九六年に「歴史資料ネットワーク」（略称「史料ネット」）と改称し、二〇〇二年五月には市民と歴史学会による組織として会員制に移行し、現在にいたっています。

阪神・淡路大震災時には、三年間でのべ八〇〇人のボランティアを組織し、被災地を巡回調査しながら、文献資料等段ボール箱一五〇〇箱に及ぶ近世から現代にかけての貴重な歴史資料を救出してきました。一九九五年以降も、鳥取県西部地震や芸予地震、宮城県北部連続地震などの大規模災害時においても、被災地へ多くのボランティアを派遣し、地震発生直後から活動を開始し、現地での地域の歴史遺産保全体制づくりに大きな成果をあげています。

近年では、二〇〇四年が風水害の多発した年となり、新潟・福井等での水害や、度重なる台風により、地域の歴史遺産に対する水損被害が多く発生しました。特に、台風二三号では、兵庫県北部や京都府北部で大規模な水害が発生したため、当センターでは同ネットワークに協力して、台風による被災歴史資料の調査・レスキュー、水損史料の乾燥・修復活動へのボランティア派遣などを行ってきました。

二〇〇八年度も、同ネットワークと協力して、神戸大学の授業科目「地域歴史遺産保全活用基礎論」で水損史料の吸水乾燥ワークショップを実施することができました。また、日本近世史と文化財修復が専門の多仁照廣氏を招いて、二〇〇四年福井水害時の被災史料保全活動と紙資料修復の方法について講演をいただくとともに、「漉き嵌め研修会」を開催し、史料修復についてのノウハウ普及に力を入れました。「漉

き嵌め」とは、和紙の紙漉きの原理を応用して、虫に喰われるなどして穴があいた部分に紙漉きを行ない、水に溶かした紙の繊維を流し込む（嵌める）修復方法の一つです。当センターでは、漉き嵌めをはじめとした、資料保存に携わる者にとって必要不可欠な技術についての研修会を今後とも行い、研究員自体のスキルアップとともに、行政の文化財担当職員や地域住民へもそのノウハウを伝えていく機会を持つ予定です。（松下）

神戸市を中心とする文献資料調査

時代の変化に耐えてなんとか遺されてきた阪神地域の数多くの文献資料が、阪神淡路大震災のために散逸してしまったことが、史料ネットの緊急調査活動によって確認されました。加えて、調査を進めるにつれ震災以前から既に消滅してしまっていた多くの文献資料があったこともわかりました。しかしそういった状況にも関わらずなお地域に遺されている資料も少なくありません。

こうしたことから、わたしたちは平常時において地域に遺された文献資料の所在確認を行なっておくことがとても大切なことを痛感しました。これら地域の「記憶」そのものである文献資料群を将来へ引き継いでいくためにも、継続的な所在把握・保全を行ってゆく必要があると考え、「神戸市を中心とする文献資料調査」は当センターの開設当初から根幹的な事業の一つとして位置づけられてきました。

本事業ではまず、地域諸団体への調査を実施してきました。

具体的には神戸市文書館および神戸市行政局財政部管財課の協力を得て、二〇〇三年三月より開始した神戸市灘区・東灘区の各財産区管理会への調査を皮切りにさまざまな地域諸団体への調査を行ってきました。この調査では、各団体が管理しているものや団体の関係者が個人的に所蔵しているもの、あるいは文献資料の所在に関する情報の収集など多くの成果をあげ、当該地域におけるその後の活動の基盤となりました（⇓灘区との連携事業）。

一方、文献資料を個人で所蔵されているお宅への調査もこれまでに多く実施してきました。コンタクトの方法はケースバイケースですが、所在確認調査から実際に文書整理の実現に至ったケースも少しづつ増えてきています。

さらに神戸市または兵庫県内を中心に文献資料所蔵機関への調査を進めています。また、それらの機関が発行した文書目録なども調査・収集しています。二〇〇四年三月からは、神戸大学の所蔵する文献資料調査を開始しましたが、詳しくは他項（⇓神戸大学附属図書館への協力）に譲ります。

これらの事業は現在もなお継続していますが、最近では、活動範囲は神戸市域だけでなく兵庫県内各地へと拡がりつつあります。広大な面積を持つ兵庫県内のあらゆる地域を対象とすることは一朝一夕に実現できることではありませんが、機会を捉えつつ今後も地道に進めていきたいと考えています。

また、以上のような調査で得たデータや情報を公開することはまだ充分に達成できていませんが、調査成果を地域の方々へ還

元することも私たちに課せられた重要な課題と考えておりますので、展示会を企画したり、出版物やホームページなどを利用して可能な限り公開へむけて努力してゆきたいと考えています。（木村）

神戸大学附属図書館への協力

神戸大学は、附属図書館及び人文学研究科古文書室において多くの文献資料を所蔵していますが、これまでその全容をまとめた調査がなされてきておりませんでした。当センターが神戸を中心とする文献資料所蔵機関調査を進めるにあたり、まず足元である学内の文献資料の調査を進める必要があると考え、神戸大学の諸施設所蔵文書調査を進めてきました。

附属図書館の中で本館的な位置にある社会科学図書館には、館としての長い歴史のなかで収集されてきた多くの文献資料が所蔵されています。代表的なものに、住田文庫（旧神戸村関係文書を含む）、村上文書（旧摂津国八部郡花隈村）などがあります。また調査時には以上の古文書類とは別に一般書架に配架されていた古文書もありましたが、それらは現在、貴重書庫に配架されています。

総合・国際文化学図書館には「郷土資料」として一括分類されていた文献群がありますが、これらは国際文化学部の前身である姫路高等学校（旧制）および神戸大学姫路分校時代に収集された文書や書籍からなる文献群です。現在、同館の書庫内に置かれた保管庫内に収蔵されています。この文献群には、約三〇年以上前に作成された目録ありましたが、当センターではこれをベースに資料の所在確認とデータの詳細化を行い、現在の「郷土資料」の纏まりの仮目録として機能させるべく、新たな目録作成を行いました。

このほか人文科学図書館や発達科学部にある人間科学図書館でも調査を行ないました。

以上のような調査を基礎にして、二〇〇九年度より附属図書館各館室に所蔵する文献資料の詳細について、その全容を明らかにする調査を行い、地域史料の目録作成・公開と史料の保存、さらにこれらを基礎に史料の電子化公開に向けての提言を行うことなどを当センターと附属図書館が共同で取り組んでいくことになりました。

一方、人文学研究科には古文書室が設置されていますが、ここには戦国期の茨木城主で近世には豊後国岡藩主だった中川家文書や、近世以来の灘酒の中心地として知られる御影村の村方文書など数多くの文献資料が収蔵されています。また当センターによって借用・収集された文書も同室に架蔵・保管されています。（木村）

豊岡市における調査事業

豊岡市と当センターとの関わりは、二〇〇四年台風二三号により但馬地方が甚大な被害を被り、直後から開始された史料ネットによる現地被災資料調査で、出石郡但東町（現豊岡市）の調査を実施したことが直接のきっかけでした。この時史料ネットのボランティアとして現地調査に携わった当センターの研究員と但東町にある日

本・モンゴル民族博物館（以下モン博）のスタッフとの交流が始まり、やがて但東町が豊岡市と合併するにおよび豊岡市と当センターとの関係に発展しました。

二〇〇七年度には、河川整備基金助成テーマ「平成一六年台風二三号水害による兵庫県北部但馬地域の水損古文書の保全と活用に関する研究」（研究代表：奥村弘）が財団法人河川環境管理財団によって採択されました。この研究助成は二〇〇八年五月をもって完了しましたが、本研究の過程では、モン博を初めとする豊岡市教委のスタッフの協力を得、豊岡市但東町矢根の大石武兵衛家文書や、矢根区有文書、奥矢根区有文書などを調査することができました。また二〇〇八年五月には、矢根自治会のご協力を仰ぎ矢根公民館において「矢根地区の古文書説明会・座談会～大井堰（宣旨ヶ瀧）の歴史～」というイベントを開催することもできました（参加者二〇名）。なお、奥矢根区有文書に関しては、別途再調査を行い、奥矢根地区地元でのプレゼン活動など、地域への還元活動が実現することを期待しています。（木村）

兵庫県公館県政資料館との連携事業

兵庫県公館県政資料館歴史部門は、二〇〇七年一〇月一日から運営専門委員を設置しました。この委員は、これまでの懇話会にかわり、歴史資料部門の運営方針や収蔵資料の利用促進対策等について多角的視点から専門的助言を得るためのものです。二〇〇七年度に続き、当センターからは、奥村弘副センター長が委員となりました。しかしながら二〇〇八年度は、専門委員による委員会の開催が遅れており、兵庫県公館県政資料館との連携事業については具体化していません。

また、二〇〇六年六月から七月にかけて県政資料館で「郡役所文書の世界」の展示が行われました。その経緯や内容については、奥村弘・深見貴成「県政資料館、神戸大学文学部地域連携センター共同企画「郡役所文書の世界」について」（『兵庫のしおり』九、二〇〇七年三月）を参照ください。県政資料館所蔵の「宍粟郡役所文書」をベースとして、文学部の授業を通じて学生を中心に展示内容や図録作成が行われ、展示を具体的に企画する学生教育という面、また公開授業・公開ゼミへの市民の参加という面など、新たな取り組みを行うことができました。（奥村・深見）

木村酒造文書の調査

二〇〇六年一〇月、神戸市東灘区石町の木村酒造で、震災時に屋根裏に上げた文書がダンボール一〇個分ほどあり、その取り扱いをどのようにすればよいかということからお預かりした文書の調査・整理を当センターが行いました。

二〇〇八年におよそ四千点の史料目録が完成。内容は、江戸後期の酒造経営を中心に家政関係を含んだものです。史料は震災の後片付けの際ダンボール等に詰め込まれたもので、もとのかたちの失われたものが多かったため、正確には分からないながら、一括されていたものはできるだけ一括書類として整理しました。（石川）

地域遺産を活用できる人材の育成

地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成のための教育プログラム

当センターは、地域歴史遺産の保全・活用をできる人材の養成・教育（学生・社会人教育プログラム）も、重要な事業の一つに位置づけています。これまで文部科学省の現代GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」事業（二〇〇四年度採択）、魅力ある大学院教育イニシアティブ「国際交流と地域連携を結合した人文学教育」（二〇〇五年度採択）などの支援を受け、リーダー養成のための教育プログラムの開発に努めました。

その結果、開発された教育プログラムが、二〇〇七年度から文学部と大学院人文学研究科の正式科目として採用され、特に「地域歴史遺産活用研究」「地域歴史遺産活用演習」（前期課程）「地域歴史遺産活用企画演習」（後期課程）の三科目が、人文学研究科の選択必須共通科目として位置づけられました。

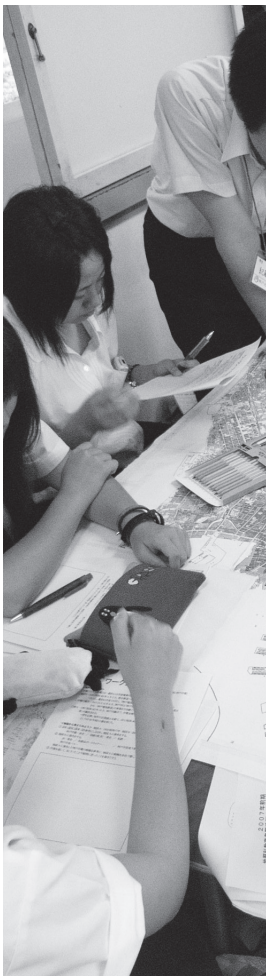
三つの科目のうち、「地域歴史遺産活用研究」（学部講義名は地域歴史遺産保全活用基礎論）は、各地の地域歴史遺産の現状と課題を把握し、その活用のための基礎的知識と能力をつける入門講義です。また「地域歴史遺産活用演習」は、地域歴史遺産の分類・整理・解読・展示活用などの実践的方法を学び取る専門的演習、「地域歴史遺産活用企画演習」は、その活用ための企画展示等を自治体関係者や地域住民と一緒に企画考案する実践的演習です。

専門コースの学生・院生は、この三つの科目を全て履修し、専門外コースの学生・院生は、まず「地域歴史遺産活用演習」を取得し、自分自身の関心と興味にしたがって「地域歴史遺産活用企画演習」を履修することが望ましいと指導されています。

なお、人文学研究科では、二〇〇八年度から大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とする人文学教育」が採択され、学域横断的な研究・教育によって大学院生の人文学的素養を総合的に向上させることを目的とした事業が進められています。「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」事業で開発された実践的な教育手法は、ここでも人文学の研究成果を市民にアウトリーチするための先進的な方法論として重要な役割を果たしています。（坂江・添田）

高等学校「地歴科」教員養成事業

当センターは、二〇〇六年度文部科学省「資質の高い教員養成推進プログラム」に採択された神戸大学文学部の「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を、二〇〇六年度と二〇〇七年度の二年間にわたってサポートしました。このプロジェクトは、みずから地域文化の担い手となると同時に、それを高等学校の地歴科の授業に活かし、次世代の担い手を育成する資質と技能を持った地歴科高校教員を養成することを目的に、兵庫県教育委員会、主に県立御影高校と連携して進められたものです。


御影高校での課題学習

神戸大学文学部は、二〇〇八年度以降も、プロジェクトの成果を踏まえて「地歴科教育論」を開講し、御影高校総合人文コース二年生の課題学習を支援する取り組みを通して、①地域文化に関心を持ち自らその担い手となることのできる地歴科教員の養成、②地域文化を教科指導に活かすことのできる地歴科教員の養成、③地域文化に関心を持ちその担い手となる市民を養成できる地歴科教員の養成、④地域の課題と日本及び世界の課題とを結びつける広い視野を持った人材の養成を行うべく、事業を継続しています。当センターは、地域文化に関する史料や情報を提供するなど、プロジェクト終了後も「地歴科教育論」のサポートを継続しています。（河島）

博物館実習

当センターでは、地域歴史遺産を活用できる人材の養成事業の一環として、歴史系博物館の学芸員をめざす学生の「博物館実習」の教育プログラムを提供しています。

具体的には、まず「博物館実習A」において、古文書等の文献史料の取り扱い方や整理の仕方、あるいは古文書を取り巻く状況や課題等について学びます。また「博物館実習B（事前実習）」では、本実習に備え、当センターが連携する県内の資料館や博物館に受講生を引率して訪問し、具体的に資・史料を取り扱う場を見聞できる機会を提供しています。さらに本実習終了後の「博物館実習C（事後実習）」では、受講生が実際に古文書等に手を触れ、その整理・解読の仕方を実践的に学ぶセミナーを開催しています（夏休み中の合宿形式）。

これらを通じて受講生が将来、歴史系の博物館において、文献史料を中心とする地域歴史遺産を体系的に保全・活用する技術と能力を学び取れるよう努めています。（坂江）

大学間交流

大学コンソーシアムひょうご神戸

本事業は、二〇〇七年七月、大手前大学・神戸女子大学・神戸大学の歴史文化系の三大学連合の形で応募した社会連携助成事業「水害で水損した歴史資料の保全・活用ができるボランティアの要請」が採択を受け、それ以来継続している事業です。初年度は、水損資料の保全・修復ができるボランティア養成のため、各大学および兵庫県立考古博物館などでワークショップを行い、またシンポジウムなどを開催しました。

二年目にあたる二〇〇八年度は、連携する大学の広がりをめざし、関西学院大学と甲南大学を加えた、五大学連合の取組として応募しました。その結果、七月に再び採択が決まり、二〇〇九年三月までの間、水損史料の応急処置法について学ぶ、学生向け・社会人向けのワークショップを各大学、

歴史系の自治体施設等（西宮市立郷土資料館・神戸深江生活文化史料館）で行いました。

今後も五つの大学間の連携関係を保つことにより、さまざまな大学や地域社会において、水損史料の保全・活用ができる人材の育成を広め、さらに将来、この問題をめぐる大学間共通の教育プログラムの確立（新しい史料学、古文書学等）ができれば幸いと考えています。（坂江）

佐賀大学地域学歴史文化研究センターとの交流

佐賀大学地域学歴史文化研究センターは、地域社会との連携をめざし、二〇〇六年四月に創立されています。当センターとの交流は、二〇〇七年度から始まり、双方の代表者が相互に訪問し、それぞれの事業内容や施設を見学し、率直な意見交換する機会を設けています。

佐賀大学地域学歴史文化研究センターは、「地域史・史料学研究部門」のほか、「考古学研究部門」「国文・文献学研究部門」「洋学・思想史研究部門」など、合わせて四つの部門からなり、また「佐賀学」という独自の地域学の創出もめざしています。当センターのあり方とは異なる面をもっており、今後、当センターの方向性を考える上で、参考すべき点が多く、さらなる交流を続けていきたいと考えています。（坂江）

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターとの交流

二〇〇九年三月七日、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター（以下関大センター）において「文化遺産学交流会」が開催されました。この催しは、当センターと関大センターとが行った初めての交流会です。この交流会は、他大学との交流を積極的に進めてきた関大センター側からの要請により実現しました。当日は双方からの地域連携をめぐる報告等を行いました。

関大センターは、新しい学問体系として「文化遺産学」の構築をめざし、指定文化財だけでなく地域の歴史に根ざした文化財を「Living Heritage」として捉え、その発掘と研究および研究成果の地域への還元を実現することを目的に二〇〇五年度に発足しています。未指定文化財でも地域にとって重要な意味をもつものを「地域歴史遺産」と捉える当センターの立場とも共通していますが、多様な学問分野を包摂している関大センターに対し、歴史文化に特化している当センターという性格の違いが活動内容の違いとなって顕れていることもこの交流会を通して明らかになりました。双方のセンターが各々の経験を通して体得した地域連携事業をめぐるさまざまな問題点や課題を共有できた点で、まことに有意義な機会でした。（木村）

地域連携センタースタッフ

佐々木衞（センター長）
奥村弘（事業責任者）

大津留厚	藤田裕嗣
市沢哲	河島真
古市晃	松下正和
添田仁	石川道子
木村修二	河野未央
坂江渉	佐々木和子
深見貴成	村井良介
森田竜雄	